

『シリーズ 20 世紀中国史』全体書評

石島 紀之

『シリーズ 20 世紀中国史』（以下、『シリーズ』とする）は、約 30 年前に出版された中国近現代史に関する戦後初の講座である『講座 中国近現代史』全 6 巻（東京大学出版会、1978 年。以下、『講座』とする）と比べて大きな変化がみられる。

2 種の講座としての性格についてみると、『講座』は研究論文集としての性格が強かったのにたいし、『シリーズ』は編集者が「実証的な研究論文を集める論文集」ではないことを明記し、執筆者に「理論的かつ問題提起に満ちた論考」を寄せるよう期待しており（「刊行のことば」）、各論文の内容も、全体としてこの編集者の意図にそって記述されている。この特徴は『現代中国と歴史学』というタイトルの第 4 巻を設けて、国内外における 20 世紀中国史研究の現状と研究課題を紹介しているところにさらに明確に示されている。

論文のテーマについてみると、『講座』では従来の革命中心史観の影響を克服する努力がはらわれていたが、各巻のタイトルから明らかなように（第 5 巻「中国革命の展開」、第 7 巻「中国革命の勝利」など）、なお革命中心史観の影響が残存していた。たいして『シリーズ』の 20 世紀中国史の見方は『講座』よりも相対化されており、各論文のテーマと方法論は 30 年間の研究の蓄積を反映してはるかに多様になっている。ただ『講座』と比べて『シリーズ』では、民衆史に関する論文が少ないことは問題点として指摘されねばならない。

『シリーズ』があつかっている時期は、19 世紀から 1980 年代である。その特徴は、第 1 巻にとくに明瞭なように、20 世紀中国を 200 年から 300 年のスパンで再考しようとしていることである。これは中国近現代史を変化だけでなく長期的な連続の面からもとらえようとするものであり、本シリーズのすぐれた点であると評価できよう。

しかし、本シリーズが『20 世紀中国史』という書名をかかげながら、1980 年代で基本的に筆を止めていることには物足りなさがある。これは 1949 年以後の領域の研究がまだとぼしい歴史研究側の現状を反映したものだが、他方、49 年以後については現代中国研究の分厚い蓄積があり、それらの成果が本シリーズでは十分に摂取されているとはいえない。中国史研究と現代中国研究との結合をどのように進めるかは今後の大きな課題となろう。

第 2 巻のタイトルである「近代性」は、中国近代史にたいする有効な分析概念として議論する価値がある。これについては、第 2 巻の総論では近代国家による均質性・同時性を強制する上からの社会の再編の面が強調されている。しかし植民地近代性の議論で重視されている下からの対応（近代的な主体・同意形成など）の面を中国近代史ではどうとらえるか、あるいは民主主義などの近代の「普遍的価値」を近代性の概念にどのように組みこむかなどの問題について議論を深めるべきだろう。

最後に、日本の中国史研究について、第2巻の「総論」では戦争責任の意識と外国史研究としての中国史研究との関係が対立的に論じられている印象を受けた。この両者の関係は、日本の中国研究にとって避けてとおれない重要な問題であるだけに、より丁寧な説明が必要とされる。

本シリーズは今後の中国近現代史研究の新たな出発点となりうるものである。今後の研究が「悪しき実証主義」（第4巻第1章13頁）におちいらないためにも、『シリーズ』が提起した諸問題にたいする活発な議論が展開されることを期待したい。